

苗場山麓ジオパーク学術研究実施報告書（鑑文）

平成30年1月31日

団体名（所属） 菅沼を考える会

代表者名（氏名） 涌井 泰二

1 研究の名称

廃村から再び森へ Part 3 ～2017年度菅沼自然環境調査報告（3年次）～

2 研究のテーマ

約40年前に廃村になった旧菅沼集落において、動植物や水文環境を津南町その他地域とも比較しながら調査することで、その希少性と多様性を明らかにしようとした。

3 調査・研究等の日程と概要（調査区域や地点・調査方法など）

※これまでの実績と今後の予定

日程	主な調査・研究等の概要
平成29年4月 ～ 平成30年1月	過去2年間の調査結果と課題をもとに、春季から初冬まで菅沼集落跡周辺において、現地調査および無人航空機による画像の蓄積により、以下の調査を行った。なお、2017年の調査では、実験を伴う調査や津南町その他地域との比較調査も一部実施した。 1 菅沼地域におけるカワトンボ属に関する調査 2 菅沼集落跡の希少生物（チャイロカワモズク）とその周辺の水文環境 3 調査池 AP-1（三角池）の植生調査

4 調査・研究結果（概要）

本年度の調査によって、津南町の平地部と比べて、菅沼地域ではカワトンボ属2種（ニホンカワトンボとアサヒナカワトンボ）の出現率の違いが改めて確認できた。菅沼地域ではニホンカワトンボの出現率が高く、その比率が20年ほど前とあまり変わっていないことも分かってきた。菅沼という津南町の北方高地に、平地部では劣勢となっているニホンカワトンボが高率で現存することが明らかになった。

希少種のチャイロカワモズクについては、水路の岸辺の草刈り等による実験により、その個体数が、水路の日当たりの良さに大きくかわってることが実験で確かめられた。また、水路の出水などにより個体数が大きく変動することも明らかになってきた。

水質調査では、本年度は昨年度と違って晩秋になってもマグネシウムイオンが増加しなかった。秋の度重なる大雨に起因すると思われる。

調査池 AP-1（三角池）の植生調査については、園芸種のスイレンの繁殖域が拡大し、希少なミズオオバコやヤナギスズナなどの生育を圧迫していることが分かった。今後のスイレンの繁殖拡大による、希少種の消滅が危惧される。

さらに本年度の調査では、集落奥にある調査湿地 EG-1 に、イノシシ、もしくはニホンジカと思われる複数の動物が入り込んでいることが確認された。これらの動物による津南町でも希少なトキソウやミツガシワなどへの被害が懸念される。

菅沼地域は、地形的にコンパクトに閉じられた多様な生態系を持ち、津南町でも価値ある特異な場所である。しかし、今後菅沼地域の自然の保全を考える上で、懸念される事実も分かってきた。3年間の調査結果を基に、津南町の大切な宝としてこの菅沼地域の利活用を考えていくことが今後の大きな課題である。

※調査・研究結果がわかる資料を添付してください。